



# ネルソン・マンデラと 南アフリカの アパルトヘイト廃止運動

---

210781037 中村仁音



# はじめに

〈南アフリカの現状〉

## ○居住面

- ・白人居住区：広大な住宅、緑豊かな環境
- ・黒人居住区：密集した掘っ立て小屋

⇒今も空間的な格差が残存

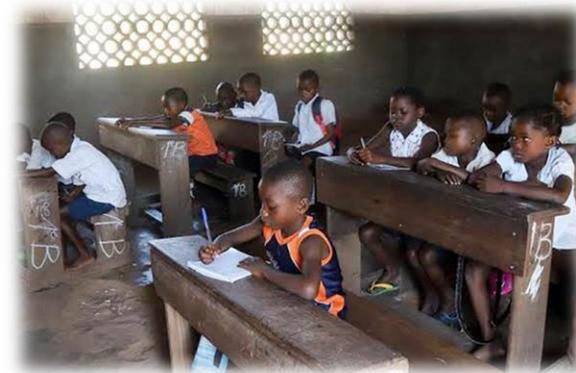
## ○教育面 → 教育予算・教員の不足

- ・高校修了試験の合格率：半数未満、小学生の78%が文章読解困難

## ○経済面

- ・経済成長率2023年時点で0.6%、失業率は3割近くで高止まり
- ・白人と黒人の平均賃金：約3倍(世界銀行報告)

南アフリカと差別の歴史をネルソン・マンデラの生涯と共に紹介



# 第1章 アパルトヘイト

## 1節：南アフリカの概要

○アフリカ大陸の最南端

首都：プレトリア

面積：122万平方km 人口：6004万人

○気候

大西洋とインド洋の間→東：海洋性の温帯

西：乾燥帯

(ケープタウン周辺：地中海性気候)

○地形

標高1200m以上の高原

大西洋・インド洋合わせて約2500kmの海岸線



# 1節：南アフリカの概要

## ○南アフリカの遺産と経済

- ・ 様々な地形・気候を反映した動植物の宝庫
- ・ アウストラロピテクス属の化石発見
- ・ 世界遺産登録：10か所

## ○言語

- ・ 11の公用語が存在

## ○経済

- ・ 新興経済大国群 **BRICS**の1国
- ・ アフリカ随一の工業国



## 2節：列強支配下の南アフリカ

### ○南アフリカの植民地化とオランダの入植

- ・南アフリカの植民地化の背景(1652～1795年)

→喜望峰を航海中継地点として、食料補給を行うため

### ○喜望峰の戦略的重要性と魅力

- ・1600～欄vs西の覇権争い ⇒ 欄：東インド会社商船の経路に喜望峰  
風・気候共に有益

### ○食糧補給基地から植民地化へ

- ・現地住民に船員数千人の食料調達は不可能と判明



補給基地から植民地へ



## 2節：列強支配下の南アフリカ

○植民地の発展と階層社会の形成

オランダ人の理想の植民地(1652~1795)



土地獲得

植民地機能を果たす  
階層社会



イギリス支配下での植民地(1795~1867)

1807~ 英政府 奴隷制度 = 虐待行為 → 奴隷売買禁止

1809~ カレドン総督により条例修正(白人雇用主有利)

1810~ キリスト教徒・教会の急増

→学校設立

→キリスト教徒にふさわしい生活 = 社会的体面重要視

1834~ フロンティア戦争・斧戦争によりコイサン人の資産破壊



### 3節：アパルトヘイトという差別

○アパルトヘイトの始まり

**アパルトヘイト = 別々にする**

- ・ 連合党(与党)vs連立政党(アフリカーナー党+国民党)  
→ 国民党政権の誕生

⇒勝利後、スローガンの「アパルトヘイト(人種隔離)」政策を実行

- ・ 1948~ 国民党：“人種の区別は政治だけでなく宗教面でも正しい考え”



**アパルトヘイト制度 = 黒人の排除 + 安価での労働力の確保**



### 3節：アパルトヘイトという差別

○国民党の差別的な法律

- 1949年：雑婚禁止法
- 1950年：人口登録法・集団地域法・背徳法(1957年～強制労働+禁固7年)
- 1952年：パス法

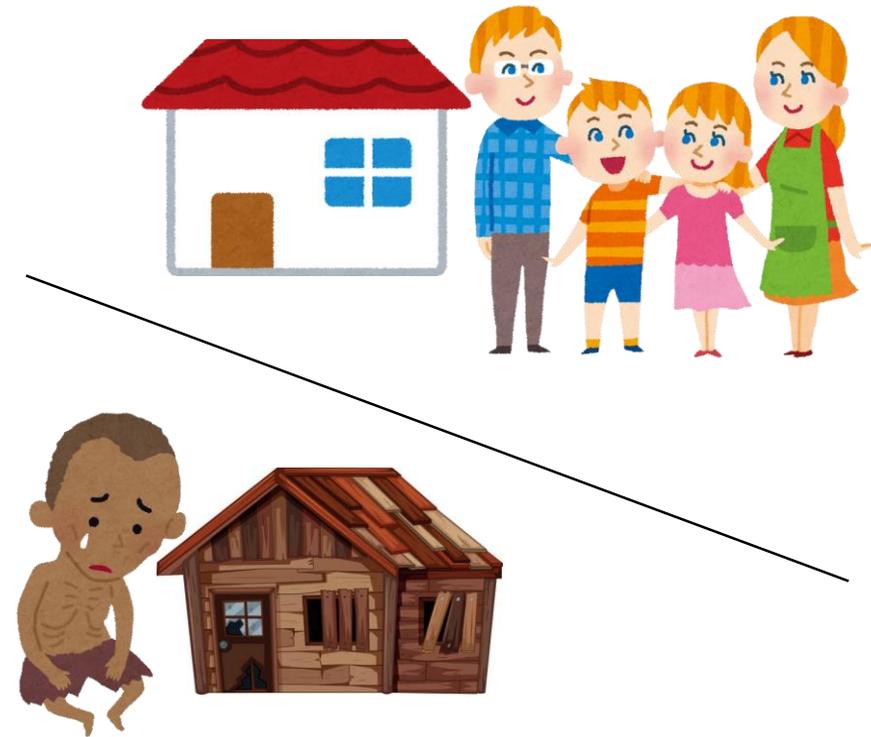


黒人と白人の完全な分離のための法律が制定

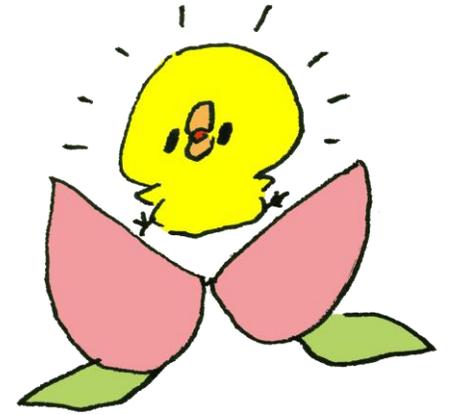
○黒人の参政権剥奪・居住制限・低賃金労働

⇒ 圧倒的多数の黒人から経済的優位の維持

⇒ 弱さを支配で隠蔽



# 第2章 ネルソンマンデラの生涯と背景



## 1節：マンデラの幼少期と初期の学び舎

### ○ネルソンマンデラの生い立ち

- ・ 1918年 7月18日 南アフリカ連邦 トランスカイ(現在の東ケープ) ウムタタ の  
テンプ王族・ムヴェゾ村の首長の息子として誕生
- ・ ネルソン一家は王の相談役としての役割

### ○教育と大学生活

- ・ 1939年～フォートヘア大学(キリスト教会設立→黒人向け高等教育学校)  
→マタンジマ、タンボとの出会い



# 1節：マンデラの幼少期と初期の学び舎



## ○政治と影響力の源泉

- ・政治的同志との出会い

→カイザー・マタンジマ：マンデラの甥、マンデラの兄的存在

→オリヴァー・タンボ　：後の政治上の同士・法律事務所のパートナー

## ○キャリアと志望

- ・父、マタンジマ：相談役のため法律専攻

- ・マンデラ　　：原住民問題省(公務員)

→黒人の最高地位の就職先

→原住民行政学・スポーツ・演劇・社交ダンスを学習



## 2節 マンデラの大学時代と政治への関与

### ○マンデラの学生時代と初期のキャリア

- ・ 1941年 フォートヘアの学生会議(SRC)に立候補の指名  
→自主辞任→退学
- ・ シスルの支援→南アフリカ大学での学習開始
- ・ 1942年 BA(文学士)試験合格
- ・ 1943年 ヴィッツ大学法学部入学→政治的な友人との出会い

### ○マンデラの政治的覚醒

- ・ ウォルター・シスルとの出会い→ANC参加
- ・ レンデベとの出会い→アフリカの土地や権利奪還のための闘いの意義を理解
- ・ 1946年 アフリカ鉱山労働者のスト & インド人の抵抗運動  
→解放運動への関心向上



### 3節 公民権運動と初期の抗議活動

○ダニエル・マラン博士と国民党の台頭

- ・ マラン：アフリカーナーの政党、憎しみが原動力  
政策理念：アパルトヘイト

1948年 白人総選挙：スマッツ(与党・連合党) vs マラン(国民党)

- ・ 国民党の標語「白人が常に主人でなければならない」  
→白人の優位を永遠不変に  
→スマッツ『偏見と恐怖から生まれた狂気 of 思想』

○国民党の政策とアフリカーナー文化への影響

- ・ 労働組合運動制限、インド人・カラード・アフリカ人の限定選挙権剥奪
- ・ 雑婚禁止法、背徳法、人口登録法、集団地域法

⇒白人は合法的に土地を確保可能に



WIN



### 3節 公民権運動と初期の抗議活動



#### ○ANCの不服従運動の始まりと組織化

- ・ 1949年 ANC：青年同盟の行動計画採択
  - ボイコット・スト・公的義務の拒否・対政府非協力 + 全国一斉労働停止
  - アフリカ人のスト = 犯罪行為 ⇒ おしとやかな抗議は終了・闘争の新時代

#### ○マンデラとその指導の役割

- ・ 1950年6月26日～不服従運動開始 →初日230人以上投獄
- ・ 目的：留置場を満員に ⇒ 逮捕者が多い = 悪法

#### ○不服従運動の影響と結果

- ・ ANC会員数：2万→10万人
- ・ 投獄は名誉
- ・ 6か月間終始非暴力
  - 指導者：2年の執行猶予のみ ⇒ M計画



# 第3章 抑圧への反撃と闘いの軌跡

## 第1節：抗議活動の高まり



○新たなアパルトヘイト法の追加

集団別地域法 : ソフィアタウンのアフリカ人強制退去

バントゥー教育法 : 教育→国家の統制下→アフリカ人の教育の質低下

○人民会議での自由憲章の採択

自由憲章 : 人権宣言+アパルトヘイト法廃止 = **全人種・民族集団の共存**



↓ 人民会議と自由憲章の危険視から取り締まりが強化

1956年：マンデラ他156名 反逆罪・現政権打倒などの容疑で一斉検挙





## 第2節：武装闘争と逮捕



### ○シャープヴィル虐殺

- ・ 1960年3月2日 パス抗議をするアフリカ人へ警官が発砲 死者69名



南アフリカ全土が怒りと騒乱状態からストライキ

→非常事態宣言発令 & ANC・PAC非合法化 ⇒ 計1万人超の逮捕者

### ○ようやく動き出したイギリス

- ・ 英 & 西側諸国：国連安保理で非難決議を採択
- ・ 英：南アの英連邦から脱退の是非についての国民投票実施  
⇒ 1961年5月31日：エリザベス女王の非管轄の**南アフリカ「共和国」**に
- ・ 非常事態宣言解除：マンデラ釈放(ANC非合法のまま)
- ・ 反逆罪裁判結果：マンデラ無罪 ⇒ ANC & マンデラ地下活動開始



## 第2節：武装闘争と逮捕

### ○武装闘争の開始

- ・ 1950年代～武装闘争提唱→MK(軍事組織)を創設

### ○出国と逮捕

- ・ エチオピアでの会議 & 武装闘争の国際支援獲得のため出国
- ・ 帰国後ルツーリに報告後、マンデラ逮捕

### ○裁判(1962年10月15日)

- ・ ANC：マンデラ釈放委員会設立 “マンデラを自由の身に”
- ・ 判決：懲役5年の実刑判決 ⇒ プレトリア刑務所へ収監

### ○リヴォニア裁判(1963年10月9日)(最高刑：死刑)

- ・ マンデラ：破壊活動、共謀、MK設立について肯定 & 『生きる権利ための闘い』
- ・ 判決：国際世論の影響により 終身刑



## 第3節：投獄と国際的支持

### ○ロベン島での生活

- ・ 5時半起床→掃除→朝食→刑務作業(昼食)→16時海水でのシャワー→独房で夕食(アフリカ人はトウモロコシの粥)
- ・ 1996年7月：ハンガーストライキ→食事の改善・長ズボンの支給
- ・ 1970年代：所内状況改善(シャワーの温水、労働の改善)、オイルショック、医学生スティーブ・ビコの黒人意識運動



### ○監獄内でのANC勧誘

- ・ ソウェト蜂起の逮捕者を勧誘→監獄内でも人員確保に成功

### ○ウィニーと自伝による関心の再燃

- ・ マンデラの妻ウィニー：鉄道放火事件以降政治家として高い影響力→黒人居住区に追放→注目度の高い活動がマンデラへの再注目へ

### ○『闘いはわが人生』

- ・ 1978年マンデラ60歳記念に演説・論文書が国際出版→インド：ネルー賞授与



### 第3節：投獄と国際的支援

#### ○「フリー・マンデラ・キャンペーン」

- ・ANCの国際的署名運動 ⇒ 82年ポルズムーア刑務所に移送、待遇の改善

#### ○アパルトヘイト体制への国際的圧力

- ・米&英 両トップが国民党支援の意思表示
- ・英サッチャー：釈放助言 ⇒ 自身より国民の自由優先 マンデラ釈放拒否  
→86年～マンデラと法相の断続的交渉開始

#### ○交渉と釈放

- ・1988年：フィクター・フェルスター刑務所移送  
→ボータ大統領との会見 & 後任デクラーク大統領就任演説”人種間の和解”
- ・1989年10月：シスルら釈放 & 公共施設の「白人専用」「非白人専用」撤廃
- ・1990年2月：ANC非合法化解除 & **マンデラ釈放**



# 第4章 アパルトヘイト制度の終焉とその影響

## 第1節：解放と新しい未来への道

### ○マンデラの釈放

- ・ 1990年2月11日 約1万日の獄中生活の終了
- ・ ケープタウン演説(黒人)、記者会見(白人)、ヨハネスブルク(黒人の問題)などあらゆる場所に出向き、黒人の支持と白人の恐怖感の解消に尽力

### ○政府との対話

- ・ ANCと政府の膨大な会談により「非常事態宣言の解除」「武装闘争の停止」「住民登録法・集団別地域法・土地法の廃止」を実現
- ・ 第三勢力と政府の癒着により対話は停滞と進展の繰り返し

### ○総選挙

- ・ 選挙活動中のマンデラ：全国で集会を開催  
「やろうとしていることと、自分たちにできないこと両方を伝える」
- ・ 1994年4月下旬投開票 投票に危険のない自由な国



## 第2節 新しい南アフリカの構築

### ○マンデラ政権の誕生

- ・ 1994年5月10日 マンデラ大統領就任式  
→様々な肌の色の人々の平和な共生「虹の国」の建設を誓約
- ・ デクラークと対立→国民党の連立からの離脱

### ○富の再分配

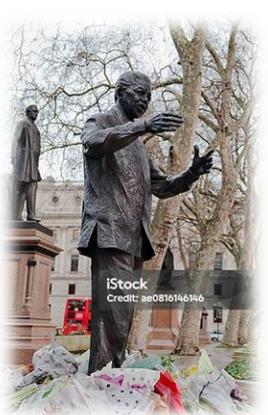
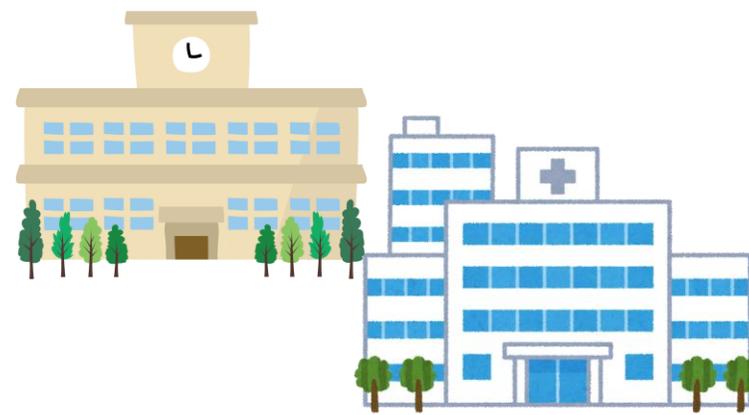
- ・ 黒人の貧困・失業率・犯罪発生率は高止まり→移民流入によりBRICS加入  
→一部黒人は政官界・経済界進出

### ○マンデラの引退

- ・ 新政権での汚職深刻  
→1997年12月議長の座をムベキに後任  
→1999年マンデラ任期満了、大統領の辞任



## 第3節：晩年と遺産



### ○退任後の慈善事業

- ・ネルソン・マンデラ財団 学校や診療所の建設・HIV問題  
→”マンデラの学校(農村学校開発プログラム)”・HIVへの意識向上

### ○引退生活からの引退

- ・釈放から続く多忙な生活から内省へ→クヌ村に移住

### ○マンデラの晩年

- ・誕生日の7月18日「ネルソン・マンデラ国際デー」
- ・2013年12月5日マンデラ95歳で逝去 自由への長い道のりの終結  
→世界中に生放送の中、10日以上为国葬  
→350年に渡るアパルトヘイト制度の終結に各国リーダーから追悼の声



# 終章：今後の展望

## ○アパルトヘイト制度終結からの現状

- ・ 1994年に人種差別終結後、未だ差別は存在



## ○平野克己の主張

- ・ 人種問題の根深さ・経済格差 ⇒ 社会の分断→国としての未来の不安定な状態  
= 「グローバル化の持つ社会的側面」 → 各国が経験→異文化理解と共存が必要

## ○アンソニー・W・マークスの主張

- ・ 人種アイデンティティの解消は困難、人種の傷跡は定着
- ・ 白人の勘違い「黒人の生来の劣等性が差別の原因」



## ○中村の見解 ⇒ 平野の案を支持

- ・ 経済発展してこそそのグローバル化による文化の違いと直面の最中
- ・ 生来の劣等性の不存在 ⇒ オバマ(米初黒人大統領就任)やボルト(陸上)などが立証
- ・ 差別ゼロは困難だが南アの歴史から考え方は変化⇒各国への平和と正義の教訓



**Thank You for Listening !!**

